

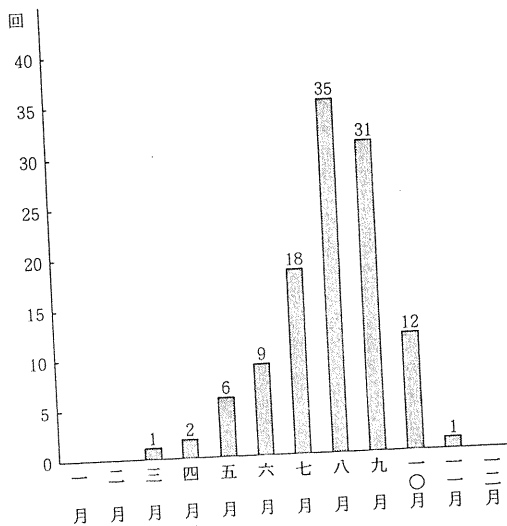
# 第五章 災害

## 第一節 概説

「徳島県警察史」(徳島県警察史編纂委員会)によると、日和佐町が風水害で特に甚大な被害を受けたのは、大正四年九月の風水害と、昭和九年九月の室戸台風であった。その後は、室戸台風のような超大型台風の直撃はなかったが、毎年、それも三〜五回位の割で、小型台風に見舞われ多少の被害を受けてきた。

試みに、明治元年から昭和三十年までの八十八年間の主な風水害の総計一五回を月別に統計してみると表記のとおりで、八〜九月に集中していることが歴然としている。

日和佐町における明治元年から昭和30年までの風水害月別表 (計115回)

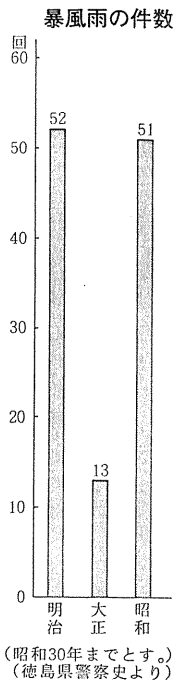


## 第二節 自然と災害

### 一 台風

#### (一) 台風の記録

明治元年から昭和三十年までの間に、一〇〇件以上の台風があり、その最大なものは大正四年九月の台風である。



月、第二室戸台風においても多大な被害を受けた。

このように日和佐町は、二十年から二十五年の周期で台風の直撃を受け、甚大な被害を受けている。

#### (二) 大正四年の台風

大正四年九月八日午後、九州のはるか南方から北上を続けた台風が大隅半島へ上陸して、同夜北九州を通過し、朝鮮東岸に沿って進んだ。ちょうど水稲の開花期に当たっていた日和佐町内では、稲が白穂になってしまった。参考までに、戎町の吉野保次郎(昭和八年四月十三日生、昭和三十二年一月十二日没)の日記を抜粋する。

九月七日 火曜日 曇、雨降り出す。暴風雨の兆候あり、波高し。  
 九月八日 水曜日 暴風雨……雨大きく波高し。午前より風強く加わり。自分は、午後三時頃大浜へ浪を見に行きたり。物すごくして、海の音ごうごうとして、耳をつんぎくばかり、風強く吹きて顔を海の方へ向けること難し。東方風なり。午後より雨大いに加わりて、川近の岸辺は皆逃げる用意をなして騒々しかりし。夜に入りて風雨激し。午後九時すぎに強き地震あり、風は午後十二時(午前零時の誤りと思われる。)を過ぎて西に変わりと言ふ。  
 九月九日 木曜日 晴……浪高し、朝起き出でて見るに、木の葉みな一夜の間に潮風にもまれて赤黒くしほみ、庭大いにさびれたり。稲作に大いに害ありたりとて、世上かまびすし。風は大した吹き方ならざりしも雨はなく、空風に潮を含みし故に木の葉や稲作、畑の物に大なる損害を蒙らしたるものと見ゆ。(略)

古老の話によると、雨が少なく、風が烈しかったのはまれなことで、稲はみな白穂になってしまい、山の樹木が

多数折れたり倒れたりした。海部郡の人々は、これを「アホウ風」と言っていた。

(三) 室戸台風

明治以降の大型台風として、最も著名なのは、昭和九年九月二十一日の室戸台風である。台風の中心に近かった室戸岬では、六八四羽(九一二ミリバール)に下り、世界最低記録といわれ、最大風速も瞬間六〇羽に達した。この台風は、中心が徳島県海岸地方から阪神地方を通過したため、前例のない大被害を受けた。大阪では、市街地が広く浸水し、天王寺五重塔が倒壊するなど大被害があり関西大風水害といわれ一世を驚かした。

さて、徳島測候所の報告によると、その概要は次のとおりである。

災害状況

室戸台風は、記録的のものであった。暴風雨・洪水・高潮と三拍子そろった大災害をもたらし、殊に商工業の中心地阪神地方を奇襲撃滅したので世論が沸騰し、台風に対する関心が高潮した。この台風が予想外に進行が速かったことと、当時はまだ無電施設がなく、電信線は暴風で破壊され連絡が不完全になった。そのために、大阪への正確な予報が発せられたのは、台風上陸の一時間前といわれて

観測所	通過中心	最低気圧	最大風速
	(ミリバール)	(羽)	(羽)
土佐清水	午前三時	九五九	一三
室戸岬	五時	九一二	四五
徳島	六時	九四三	三七
大洲	七時	九四〇	二六
大阪	八時	九五五	三〇
賀	九時	九六六	一三

観測概況(瞬間風速六〇秒羽)(九月二十一日)

いる。もし室戸岬の観測が直ちに通報されていたら、三時間前に警戒警報が伝えられたはずである。大阪では、高潮の襲来についてまったく経験がなかったため、予想外の被災となった。

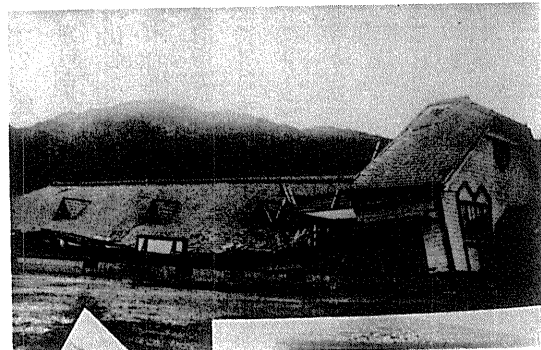
なお、この台風によって、多数の学校が倒壊したことも世人は驚いた。県内でも、中・小学校あわせて、全壊二棟(一五校)・半壊一〇棟(八校)・大破二棟(一〇校)に及んでいる。(日和佐町郷土誌抜粋)

赤河内村でも、西河内小学校の裁縫室が倒壊・赤松・大戸・山河内各小学校も大破・伝染病院が大破・役場などに

当時の日和佐町の被害表	
住家全壊	九戸
同 半壊	一四戸
非住家全壊	一九戸
同 半壊	三〇戸
家屋破損	一五〇〇戸
漁船流水全壊	二八隻
同 破損	一三〇隻
家屋浸水床上	九戸
同 床下	五五戸
道路欠壊	二〇五羽
護岸欠壊	五三二羽
負傷者	七人
稲作被害	六割
減立木折損	多数

も相当の被害を蒙った。災害を受けた各小学校と、伝染病院ならびに赤河内村役場の復旧費として、昭和九年十一月十九日に、起債金額二、〇〇〇円と追加額三、〇〇〇円、計五、〇〇〇円が村会で議決され、大蔵省預金部から借入れを受けている。年利率三分二厘・返還期間は、昭和十四年から同二十八年に至る十五年間払いであった。(昭和十年度村会議決書編より)

1 日和佐町の状況



倒壊した海部中学校の雨天体操場

室戸台風の状況につき、日和佐観測所から徳島測候所に報告された記事は上表のとおりである。ただし、気温と雨量は暴風と浸水のため観測していないが、他の要素によって気温は二二度から二九度・雨量は五〇ミリぐらいと推定される。風向南東・風力颯風九月二十日午後一〇時ごろより風力強く、翌二十一日午前三時ごろより暴風雨となり、同四時ごろより五時四〇分の間が最も烈しく、同七時ごろには止んで風向が変わった。そのため、全町内の住宅では多い少ないの差はあるにしても、棟や瓦を吹き飛ばされ、板囲いや都を大破された。殊に、徳島県立海部中学校(日和佐高等学校の前身)は、南面が広い運動場で、風当たりが強かったため、雨天体操場(体育館)と図書館が地上におしつぶされたようになり、特別教室は大破、その他各建物とも、屋根瓦の大半をはぎ取られ、目もあてられぬ惨状となった。小出侍従の御差遣があったのはこの災害である。

## 2 風損木の処理

室戸台風の被害は、山林の立木にまでおよび、風損木が相当にできた。倒れた木・幹の中ほどから折れた木などが続出した。北河内宇北分の通称深瀬では県道に杉の大木が倒れて交通を遮断するほどであった。赤河内村では、風損木の処理のため昭和九年末に村営の移動製材をはじめた。責任者は、山河内の石本峰吉（明治四十年六月三日生）・西河内の中久新太郎（明治三十四年一月十日生・昭和四十八年十二月一日没）・田村力松（明治四十一年五月三十日生）であった。

この人たちが協力して、県から借入れた簡易製材機で、風損木を製材するため山河内・西河内・北河内・赤松の各地域をまわった。製材された用材は、ほとんどが建築用に利用され、損害の復旧に大きく貢献した。期間は、二年ぐらい行われていたようである。

## 3 思い出の学用品セット

当時（昭和九年）西河内小学校の三年生であった岡本勲委員は、翌日の九月二十二日の放課後、友達数人と大浜海岸へ波を見に行った。もはや台風は過ぎ去って、昨日の事が悪夢であるような日和であるのに、海はなお、荒れに荒れ、怒涛は深く砂浜に喰いこみ、保安林の松原の根元を洗うほどであった。現在の防波堤を越すほど、大波の穂先は伸びて目を見はるほどであった。その上、荒れ狂うように岩を打ち地を打つ波の響や地鳴りに、背ずしも寒くなるほどの恐怖感を覚えた。

後山の裾を縫って通じている県道は、飛沫に洗われ波のしぶきを散らしていた。この状態だから、前日の海の荒れようは、一層自然の猛威をたくましくしていたものと思われる。松の枝のねじ切られた傷跡・傾いた電柱・屋根瓦の破損など、台風の名残りがすさまじい町内であった。

後日、皇室より災害地視察のために小出侍従を差遣せられ、九月三十日徳島県知事金森太郎の案内で、日和佐町を

巡視せられた。その後、復旧作業も順調に進み、ようやく台風の傷跡から立ち直った十二月のある日に、西河内小学校校長宮原清雄から、朝礼の際に見舞品が披露された。

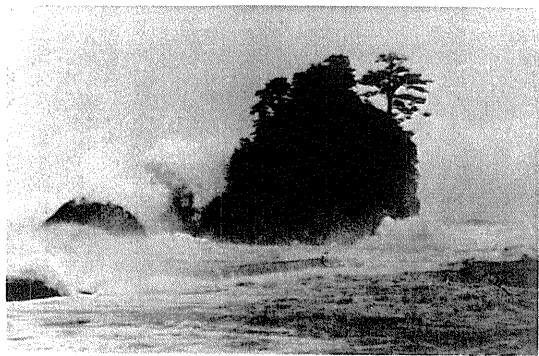
室戸台風は、特に学校の被害が大きかったので、天皇初め皇族の方々が、大変心配され、有難いお心で義捐金を集められた。かくてお見舞として、児童一人一人に学用品のセットが贈られた。担任の隅田ヨシ子訓導から、その見舞品を受け取った時は、その重量感が校庭に立っている足の裏にまで伝わり、生まれて初めての喜びを味わった。セットには、ノートが数冊・鉛筆一ダース・消ゴム・のらくろのデザインをした鉛筆削り・セルロイド製のさしや定規等がつめられていた。あの時の嬉しさは今でもはっきりと心に残っている。

## 四 第二室戸台風

昭和三十六年九月十六日には、第二室戸台風が襲来して、全国的に被害をおよぼした。特に徳島県は、大きな損害をこうむった。平均風速二七・五㍎、最大風速三八㍎、最低気圧は、九三五ミリバールで、徳島地方気象台はじまって以来の記録であった。

台風の通過時が、ちょうど満潮時と重なったため、刻々増水する海水の不安は大きかった。記録的な高潮被害で死傷者は、県下で二六四人・全壊家屋五六九戸・半壊一、七七七戸・流失・埋没家屋五三戸・床上浸水家屋二五、三三三戸におよんだ。

日和佐町の被害状況をまとめてみると次のとおりである。（日和佐町役場建設課調査）



立島をうつ怒濤（第2室戸台風）



日和佐漁業組合前の高潮

二 水 害

(一) 昭和六年の大洪水(九月二十六日)

北河内字本村では、県道の一部(長谷猛家のすぐ北側を走っているところ)が数十間にわたって欠壊し、濁流が渦を巻いて流れ大洪水となった。その県道に面して建っていた三戸が道の欠壊とともに流失し、字登り・字本村は濁流



流失寸前の厄除橋(昭6.9.26)



浸水した桜町(昭6.9.26)

(二) 日和佐町の災害状態(日和佐町郷土誌引用)

昭和六年九月二十六日、意外の大洪水があつて、全町が水につかり、どの町筋でも船で交通する奇観が見られた。当時の気象については、理科年表に「昭和六年九月二十六日、台風豪雨。経路九州北部・中国・西部・日本海。被害地は四国南東部、南紀その他。」と記載されている。

日和佐町では、前日から雨が降りつづき朝方にまた豪雨となった。午前七、八時ごろ小止みになったが、例の如く

の海と化し、北河内の通称山戸を除いては、ほとんどの家が床上・床下浸水となり大損害を受けた。  
北河内字本村の上から下にかけては、稲田が砂礫に埋められ、さながら広い川原と化し約二町歩の田が埋没した。その後、復旧作業のためにレールを敷いて、トロッコで砂・小石等の運搬作業をしていたが、再び十月十三日の洪水で損害を受けるなど、多くの困難を克服して県道の修理を完成した。その後は現在(昭和五十六年)に至るまで、このような洪水の例はない。(原田愛次郎談)

(1) 住家の被害	全壊 九戸 九世帯 四五人	半壊 四五戸 四五世帯 二〇人	床上浸水一二四戸 一二四世帯四八三人	床下浸水一四五戸 一四五世帯五二一人	非住家の被害	全壊 七戸 半壊 二九戸	(3) 農林漁業関係	漁港防波堤 一〇か所 延長一五七呎	水稲の倒伏浸水による減収	復旧見込額三八〇万円	九〇パーセント減収	三〇町	五〇〜九〇パーセント減	八〇町	三〇〜五〇パーセント減	一八〇町	三〇パーセント以下減	六〇町	立木の倒伏 一〇〜四〇年生	二、〇〇〇本	漁船の被害	大破 五隻	
(2) 建設関係	町道欠壊	か所 五	延長 三五二呎	復旧見込額 二、三〇万円	河川護岸	か所 一	延長 一〇呎	復旧見込額 三〇万円	橋梁半壊	か所 一	延長 一九呎	海岸護岸	か所 一	延長 五五呎	復旧見込額 一〇〇万円	中破 五隻 小破 二〇隻	漁網流失	小敷網 二統	立網 二統	鶏舎被害	大破 一〇棟 三六〇坪	鶏へい死	三か月〜六か月 一、五〇〇羽

日和佐川河口が激浪のため増水し、このため西河内より下流へかけての堤防が所々で決壊した。右岸では、西河内小学校（現在の富田病院）上手で、堤防が約一〇〇呎にわたって破壊し、川水が県道に沿って日和佐町内や寺前一带に流れ込み、左岸では天神の下と、当時の県立海部中学校（日和佐高等学校の前身）裏で二か所、堤防が破壊して濁流が西町・本町を突破し東方の全町へ浸入した。

一方、高浪により河口を堰止めたため、三軒屋や桜町裏の低地に河水が逆流し、全町の浸水は見る見る水位が高くなり、午前十時ごろ最高に達した。通称新町通りでは旧日和佐公民館（奥河内）前まで浸水した。当時の各町路面における最高水位は調査の結果次のとおりであった。

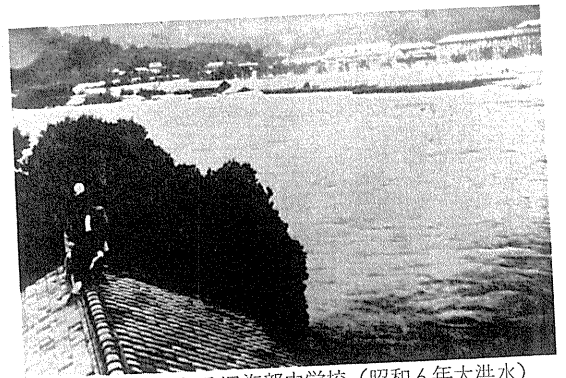
当時の県立海部中学校の運動場は泥海となり、（写真参照）役場は、床下いっぱいが泥に埋まったが床上は浸水しなかった。町方では、八割位が床上・床下浸水となっていた。（表参照）

日和佐町	戸数一、〇七四戸	人口五、九二四人
洪水当日	家屋床上浸水 二四〇戸	家屋床下浸水 三七四戸
六月十二日	四〇七	三三二
九月二十六日	一三五	二四三
十月十三日		

どの町筋にも、何隻かの船が往来するという珍しい光景が見られ、日和佐小学校への道路を船で避難した人びとも多かったといわれている。通称本町の屋号谷兵では、病人を船に乗せて新町の別荘へ送った。ま

各町路上最高水位

各町	測量地点	水位
本町	南米田書店前	約一・二
桜町	三ツ谷	約一・二
西町	役場前	約〇・五
新町	東	約〇・三
東町	部	



濁流に洗われる旧海部中学校（昭和6年大洪水）

た、薬王寺門前の福田文次郎（明治三十年七月一日生・昭和六年九月二十六日没）は、自宅の軒下まで水が来て危険を感じ、二階から約六呎の距離にある紀州接待所（現在の薬王寺信徒会館）の柱に綱を渡し、七歳の男児を負うて綱を頼りに渡ろうとしたが、水勢で押し流されてしまった。同人の死体は、弁財天で発見され子供の死体はその中間の田地で発見されたとのことである。

洪水が引いた後でも、各家庭とも泥が部屋に堆積して復旧作業に苦勞をしたという。日和佐町役場では、二十六、二十七日の両日、日和佐小学校と薬王寺の両所で炊き出しを行い避難者に配ったが、その時の人数は五六五人で、使用米が三石五斗となっている。なお、県罹災基金による救助を申請し百数十人に救助金を交付した。

### 三 地震・津波

#### (一) 安政の大地震

古老の話によると、安政元年の大地震では、毎晩のようにゆれて年の暮まで続いたようである。人々はおそれおののき、藪の中へ避難した。藪の中でも、特に土用竹は細い根が四方八方へ広がっているため、土地割れが小さいという。このため、村人たちは争ってその藪に逃げこんだとのことである。

過去の地震の記録としては、山河内宇大越の志茂田愛三家に、つぎのような安政の大地震の記事がある。

「安政元年寅の年の十一月四日午前十時ごろに、地震が起こり一時間位すると治まって静かになった。ところが、あくる日の夕方、天に雲も無く、空も様子がこの上なく、よくなってきたと思う間もなく、大地震が起こり、家の棟が地につくかと思うほどゆれた。瓦は動いて風に飛ばさうだ。土地に落ちる音もすさまじく、こんな有様で、家の中におる者は一人もなかった。外へ出て、藪へ走るものや、山へ走る者があつた。土地が揺れる度に、井戸も揺れて水もなくなってしまう。多くの人は、大声で家族を呼び集めようとい騒いだ。」

後にきけば、大潮（津波）がさしこんで来て、日和佐村は無事であったが、北河内村と日和佐村との境の宝木まで、漁船が三、四隻、大阪通いの廻船が二隻、潮に流されて来た。この時期の郡代が高木真藏であった。真藏は地震津波の被害調査のため、牟岐・浅川・鞆浦の方へ出張し、被害の大きさに驚くとともに、この状態を後学のために、後世に残すことを考えて石に彫った。恐しい地震と、このような津波の害は、一〇〇年を周期として後年にも、また定めて起こるであろう」

(二) 南海地震

(1) 概要

日本の大地震（津波を含む）は、外側地震帯によって起きるものであり、その歴史から考えると、一〇〇年目前後に一度あると思わねばならない。昭和二十一年十二月二十一日南海地震が突発したが、これは安政の大地震から約一〇〇年目にあたっている。

南海地震の発震時刻は、二十一日午前四時一九分で、震源地は中央気象台の観測によって紀伊半島西南沖（東経一三五度六分・北緯三三度）と決定されている。震源地は日和佐からいうと、東南八五筈に当たる。しかし、高知県一帯の被害が案外激甚であったので、「潮岬沖三〇筈から西へ二〇〇筈にわたる郡発地震である」との一説もあった。とにかく、南海地震では地震直接の被害よりも津波の被害が大きかった。（日和佐町郷土誌）

(2) 津波の状況

震源地が沿岸に近い場合には、海が比較的浅いので津波の機構は小さくても到達の時間が早くなる。海部郡沿岸の各地でも、発震時から一〇分余りで津波の第一波が襲来し、一分から二〇分で周期的な第二波第三波が襲来した。そして、この第二波が最も高く主な災害を与えた。津波の前兆としての引潮は現れないし、反対に上げ潮があったこと等も、暗夜のために不明であったという。地震後においては、一日に数回の地鳴りが数日間つづき、その後

海部郡震災被害表（海部地方事務所民生課調）

工場	公共建物		家					人 —— 傷死者	罹災者 人戸 員数	被害別 町名	由岐	日和佐	牟岐	海南	海部	宗喰	合計
	浸水 床上下	半全流 壊壊失	浸床	浸床	半壊	全壊	流失										
			水下	水上	非住家	非住家	非住家										
半全流 壊壊失		五—	一七 三〇	六三 一五	一六 九	四四 五二	四一 二	四、七 九三 〇	由岐		二—	九二四	一一四		二—	一七二〇	
		二—	一四 一四	五 四	三四 八	一 二		一、二 四四 七	日和佐		二—	三三八				二二	
		九二四	三三 一六	三八 四	二 五	一 七	一 四	五、一 五〇 六	牟岐		二—	六—六				二二	
		六一六	一一 〇三	一五 二	一 七	二 四	〇〇	二、九 六二 八	海南		二—	六一六				二二	
		—			一 三	五 二	〇〇	三 九	海部		—	—				二二	
		—			一 三	五 二	〇〇	二、一 四六 六	宗喰		—	—				二二	
		—			一 三	五 二	〇〇	一、六 三、 七六 一	合計		二—	九二四	一一四		二—	一七二〇	

時々地鳴りがあった。これは、小地震の初期微動（縦波）によって起こる現象であり、よく注意しておれば、地鳴りの直後に、わずかながら衝動を感じる小地震のあることがわかるのである。

南海地震では、震源地から両側の沿岸（和歌山県西南部・徳島県海部・那賀二郡）に於て被害が大きかった。特に海南町浅川は典型的なV字型湾であるため、最も被害が甚大で、小さい町ながらもその大半におよぶ大きな被害を受けた。

これは、①津波襲来の時間が意外に早かったこと。②夜間であったこと。③満潮時と重なったこと。以上のような不利な条件が重なったためであろうと考えられる。

各地の被害一覽表（朝日新聞調）

被害別	府県別														合計
	高知	和歌山	徳島	香川	兵庫	三重	大阪	岡山	愛媛	その他					
死亡者	六七〇	一八七	一八一	五二	四九	七二	三三	五一	二六	四四	一、三六三				
家															
全壊	四、八六五	九六四一	三、三九六〇	六四〇	一三六	二六二一	〇九二五	八六一	〇二五一	五〇六					
流失	五、五六六	三、八六四	五、八二			二二	五五二			六、一〇九					
浸水	六〇八一	一、八一五	五七八			七八六一	四、三三七	〇八〇		三三〇一	四、六二九	〇九四			
焼失	一九六	二、三九九								二、五九七					
船の損害	八一六	一、〇〇〇	九二一							一七三					
橋の損害	一八	二〇	三三	七八						一六〇					
堤防の損害	三八	六	五五	一二二						二九四					
道路の損害	七二六	一一八	一五七	二三七						一七					
合計											一、三二九				

幸にして、津波の被害が最も小さかったのは日和佐町であった。これは日和佐港がM字型湾で、津波の被害を最も受けにくいことと、奥潟川・日和佐川・北河内谷川の三つに分流して、比較的奥が広いことによるものであろう。

次に考えられることは、日和佐湾が東向きになっていて、津波のエネルギーをまともに受けにくいことや、大浜海岸が急深になっていて、また、田井に亀井港があることなども大きな理由として考えられる。とにかく、いろいろな好条件が相乗的に作用して、前頁の表のように損害軽微になったものと考察される。

③ 日和佐町の概況

前述のように南海地震の被害は、日和佐町では軽少であったが、町民は被災後二日ぐらい恐怖にかられ、人心は動揺し、避難に汲々として生業など身につかぬ状態であった。しかし、まもなく平静に戻り、自家および町内の被害の修復に努力する一方、由岐・浅川・牟岐方面に対しては、消防団・有志等によって救援奉仕作業を開始した。

なお、この地震の罹災の復旧に当たり、隣保相互扶助の数々の美挙がある。家を失い家族と離散し、衣類を流した隣町村の人々に対する救援運動が盛り上がり、正月の餅を集めて送ったり、衣類や児童生徒の学用品を持ち寄って送るなど数々の見舞品が送られた。一年ほど前までは、戦時下のため、空襲に備えての避難訓練が徹底していた。津波襲来にあたっては、敏速な避難準備と行動をとることができた。しかし、反面大地震後に小さい余震があると、大地震・大津波が来るという「デマ」に迷わされ、日和佐小学校や裏山に二晩も仮泊した町民があった。

救助金・見舞金配分（海部地方事務所民生課調）

配分項目	町村名										計
	由岐	日和佐	牟岐	海部	南部	海部	実	喰			
罹災救助金	七〇一、四五二	一、〇二二	一、二三三	九九四	七五九	一、〇六四	八三三	七、五二二	一一一	二、三三三	一一一、九一七
義捐金	二〇九、五〇〇	二五、四〇〇	二八一、一〇〇			三四、五〇〇	三、七〇〇	六九、二〇〇	六三三	四〇〇	六三三、四〇〇
御下賜金	三、五二五	二七五	六、八〇〇			七、七六五	四〇	一、一五〇	一九	五五五	一九、五五五
見舞金	三三三、二三五	四、八七五	四四、四八〇			六八、八六五	三一五	一五、三三〇	一六七	一〇〇	一六七、一〇〇
庶民住宅	三八	一	一〇二			一一四					二五八
住宅補修	三〇	三〇	四〇			四〇	一〇	一〇			一六〇

救助物資配分

物資名	町村名	由	岐	日和佐	牟岐	海	南	海	部	宍	喰	計
毛皮(枚)			七二八	八五	一、三二〇	一、四九八			七	三四〇		三、九七八
冬衣			五七〇	六九	一、一一〇	一、〇三四			五	二四〇		三、〇二八
冬袴			五四〇	六八	一、一一〇	一、〇三四			五	二四〇		二、九九七
冬じばん			四六〇	六八	一、〇八〇	一、〇三四			五	二四〇		二、八八七
冬袴			四六〇	六八	一、〇八〇	一、〇三四			五	二四〇		二、八八七
靴			二、五二〇	三〇四	五、四六〇	四、五二四			二四	一、一五〇		一三、九八二
軍手			六三〇	七七	一、三一五	一、一八六			七	二八〇		三、四九五
かんづめ(絆)			五、〇六〇	六六	一、三〇〇	八、七六〇			三九	二、〇一六		二八、二四一
かんばん(絆)			一、六三四	一九六	三、九七四	二、八〇四			二二	六四〇		九、二七〇

地震の場合は、家屋の壁面に亀裂が入ったり木組みが狂ったりするので、古い建物の危険が十分自覚され、学校・役場等の古い公共建物には、危険防止の補強工事として、「すじかい」が入れられた。また個人住宅についても耐震建築の必要性が痛感されて、堅牢安全な住宅の建築が促進されるようになった。

港湾の荷揚場でも大きな亀裂を生じ、その上、沈下して船をつないだり荷物の揚げ下しには大きな不便をきたした。災害復旧事業として、昭和二十六年より以後三年計画で国庫補助の具施行による港湾修築事業が行われた。すなわち、港口の荷揚場に延長三三〇呎、エプロン幅六呎から一〇呎・高さ四・五呎のもの、また、日和佐水産試験場前、弁財天に延長二五〇呎にわたり築堤が行われ、従来より約一呎のかさ上げが行われて、面目を一新し、良港湾の施設となった。また、大浜の後方に一五〇呎の防砂防波堤が造られた。教育におよぼした影響としては、罹災地の人々に対しては精神的・物質的な救援が必要であるという気風を植えた。日和佐小学校は、一兩日の休業で平常授業に復した。ちょうど二学期末で休暇に入る直前であったため授業への影響は少なかった。

厄除橋の破損は、三学期を迎えた生徒の期夕の通学に危険と不便を招いた。しかし、これによって町民は木造橋が時代おくれであることを痛感し、鉄筋コンクリートの永久橋設立の気運を盛り上げる結果となった。

(海部郡教育研究所発行 研究紀要 昭和三十五年三月発行 八幡 与三郎の研究より抜粋)

第三節 その他の災害

一 火 災

(一) 天保十年の日和佐浦の火災

天保十年海部郡奥河内村から出火し日和佐浦へ延焼した火事につき、阿淡年表秘録(巻十)に次の記事がある。天保十年己亥四月六日戌申刻、海部郡奥河内村より出火、日和佐浦類焼、家数三百二十軒焼失丑申刻、鎮火。この火事は、戌申刻(午前八時ごろ)発火し、丑申刻(午前二時ごろ)鎮火した夜の火事であった。さらに、同年、また、日和佐浦に大火が発生したものか、阿陽市街実記(巻一)の天保十年己亥年の条に次の記事がある。十一月六日の夜、日和佐浦に大火、町家六百軒ばかり焼失す。(県警察史引用)

天保十年以来、日和佐町はこのような大火災の発生はないが、十年に一回ぐらいの割で小火災が発生しているといふことが、統計上から推察される。

(二) 日和佐町の火災

明治以降の大火としては、明治三十一年の薬王寺の火災、昭和二年の谷春製材所および日の出座の火災がある。その他、住宅、納屋、山林等の火災があったようであるが、資料は発見できなかった。

ちなみに、昭和五十年十一月発行の「ひわさ広報」によるとつぎのような記事があるので参考としたい。



「日和佐町では、昭和二十四年以降現在（昭和五十年十一月）までの二十六年間に六十一件の火災が発生しています。年平均二、四件、これを昭和四十四年から今までの過去六か年にみると、発生件数が三十二件、年間平均が五、三件となっています。内わけは、家屋二十三件、山林八件、船一件で、家屋が断然多く、出火原因は、台所・風呂・たばこの不始末が主なものです。

火災の発生時刻は、午前八時―十時、午後二時―四時のいわゆる炊事や食事の後が多く、地域別に見ると、北河内十二件、赤松九件、桜町八件、田井恵比須浜七件となっており、その他の地域に比べて多いが目立っています。」

(三) 山 火 事

昭和五十二年八月二十二日、午後零時半ごろ、日和佐町山河内字西山の通称一番谷山（標高五六〇㍎）の中腹から出火。台風八号の影響による北西一四―一五㍎の強風にあおられ、火はたちまち同山の山頂まで燃え上がり、さらに尾根伝いに南西方向に燃え広がった。

日和佐町・牟岐町の消防団員、地元住民ら約五〇〇人が消火と警戒に当たったが、急斜面の山中で消火活動がはかどらず、同日午後一時現在約一三〇㍎（日和佐町調べ）を焼いてなお延焼を続けた。

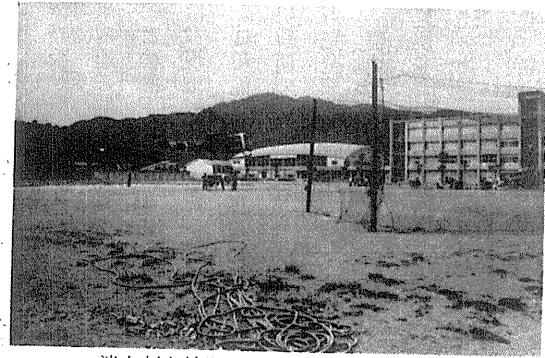
県消防防災課によると、最近の山林火災で大きかったのは、さる昭和四十九年一月の海部郡海南町で、四五㍎を焼いた火事だが、今回はそれをはるかに上回る最大級のものであった。

出火したところは、日和佐町北河内・岡本淳一ら七人が県森林公社と協力して、分収造林にしている山で、日和と牟岐の町境に近い地点である。一―二年生の杉やひの木が次々に燃えあがり火は牟岐町境に迫った。火事の規模が大きく、消火の見通しが立たないため、日和佐町は県を通じて二十二日午後二時すぎ、海上自衛隊徳島教育航空群ヘリコプターの出動を要請した。同群では救難用ヘリコプターなど二機を飛ばせ、空から状況を視察して航空写真を撮った。また、県消防防災課は、空中からの消火剤散布を計画、陸上自衛隊中部方面航空隊八尾基地のヘリコプターに二十三日早朝からの出動を要請した。

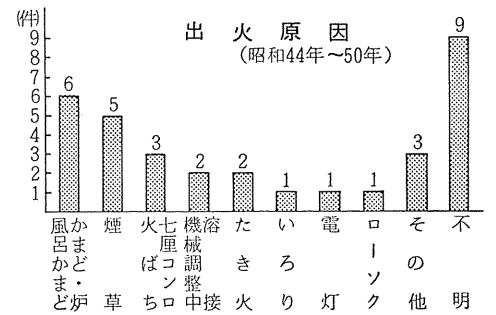
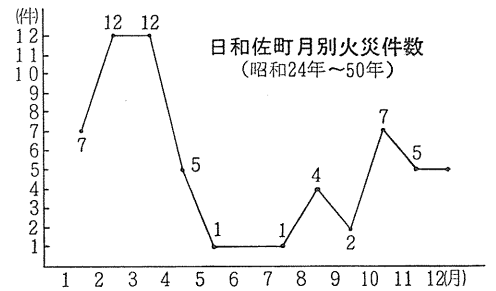
消火器材のバケツ・薬剤（第一リン酸アンモニウム）などは、三好郡池田町の徳島営林署池田地区担当の事務所からトラック三台で県立日和佐高等学校グラウンドまで運んだ。火災の本番で薬剤による消火が行われたのは、県下で初めてのことであった。

地元民が待ちかねた八尾基地のヘリコプターが同町に到着したのは、八月二十三日午後一時前であった。偵察機のOH6型機二機と中型輸送機のHUIB型六機は、ヘリ隊長の二佐小林満の指揮で、午後一時半ごろから県下初の「空中消火作戦」を開始した。

高知営林局徳島営林署・奈半利営林署から急きょ取り寄せ、営林署職員らが準備した消火液を五〇〇㍎以上の空中散布用のパッケージに満載し、基地の県立日和佐高等学校グラウンドと一番谷山の延焼地点までの約七㍎を休みなしの



消火剤を輸送する自衛隊ヘリコプター



「ピストン飛行」をし、火勢のつよい北東部斜面一帯に多量の消火液を空中散布し続けた。しかし、火の手が尾根伝いの数か所に散在、けわしい山岳地帯ということもあって、消火活動は思うにまかせず、成果が現れ始めたのは、夕やみ迫る同六時過ぎであった。準備した六トン余りの消火剤を散布し尽したところであった。

この間、八月二十二日の昼過ぎから出動の日和佐町消防団員や、応援の牟岐・由岐両町の消防団員ら二〇〇人余りは、現地対策本部の春江正雄宅や火の手の見える日和佐川沿いで、いらいらしながら待機していた。

日和佐町消防団長の鳥三郎は、「こんな大きな山火事は初めてだ。急傾斜の地形で、火災状況をつかむのも遅れ、初期期の消火活動が思うにまかせなかったのが残念だ。団員らは徹夜で疲れているが士気は盛んである。なんとかして完全鎮火させたい。」と語り、同夜は団員五〇人とともに徹夜で現場付近一帯を見張り続けた。

現地対策本部で陣頭指揮をする森義勝町長は、「出火の発見は早かったのだが、消火に悪条件が重なった。しかし、延焼をこれだけに押えられたのは不幸中の幸いであった。消防団員らの努力、自衛隊の応援消火に感謝したい。」と述べた。

火災は二十三日の夕方、午後六時ごろ鎮火したが、翌日二十四日久しぶりに台風雨が降り完全に消火した。西山地区の春兼タネは、「生まれて七〇年になるが、こんなこわい目にあつたのは初めてである。消防のみなさんや自衛隊のヘリコプターが、けんめいに消火してくれていたの、心配はないと思っていたがそれでも不安であった。」と述懐していた。

出火原因については、牟岐警察署で調べたが、現場は国・県道からはなれた奥地で、ふだんから人の出入りの少ない所であり、狩猟もオフシーズンでハンターも入っていないので、山仕事をしていた人の火の不始末か、煙草の火が原因ではないかと見ていた。